



理事長
峯岸 敬 (群馬大学教授)

第15回日本生殖内分泌学会学術集会に関しましては、金沢大学医学部泌尿器科の並木幹夫先生のお世話で千里阪急ホテルと千里ライフサイエンスセンターを会場に開催されました。招請講演はNIHのDr. Maria L DufauがLHによる精巣での機能調節について、教育講演は岡部勝先生の受精のメカニズムに関する講演で精巣・精子の機能についての最先端の概説を伺いました。またシンポジウムは卵巣機能調節に関する新しい知見に関する話題であり、招請・教育講演と合わせて雌雄の性腺機能に関する最新の研究成果を理解する場を提供する企画でした。

最近の生殖内分泌の進展に目を向けると、インスリンや脂肪細胞から分泌されるレプチンが生殖機能に深い関わりがあることが知られていますが、さらに骨格に関わる臓器が生殖に関与することを示す報告がありましたので言及したいと思います。骨から分泌されるOsteocalcinが精巣の七回膜貫通型レセプターであるGPCR6Aに結合して、テストステロン分泌、精子形成に促進的に働くという報告がされ、骨が生殖系に関与するというものがあります。今までは精巣から分泌されるテストステロンが骨の強度維持に働くことなどが知られていましたが、この論文は、骨と精巣の臓器の機能調節にフィードバック機構が存在することを示しています。また精子には膜型のプロゲステロンのレセプターが存在し、このレセプターはプロゲステロン刺激により細胞内へのカルシウムの流入を促進する作用があることが示されています。この報告は細胞膜に存在するステロイドホルモンに対するレセプターが機能していることを示すものであり、今後の新展開が期待されます。このように、男性の生殖機能に関する新たな興味ある報告に接する機会が増えていますが、これらの研究は体外受精による治療のみを扱ってはいは注目されない生殖内分泌に関する分子メカニズムが検討された結果です。今後も生殖医療に関しては、基礎的な分子メカニズムの解明が必要とされ、これらのダイナミックな全身のホルモン分泌や臓器相互調節のメカニズムの知見が集積することにより生殖医療に新しい治療法をもたらすことが望まれます。

この機会に生殖に関わる若い方々に、内分泌の分野に目を向けていただき、積極的に内分泌学会に参加し、その延長上で内分泌専門医を取得する努力をしていただきたいと思います。生殖医療は卵子や精子のみを操作しているのではなく、女性の全身管理を行う医療であり、視床下部-下垂体-生殖臓器の連携はもとより、脂肪や骨までもがこれらのサークルに入りこむことから全身の機能を理解する必要があります。本学会の会員の先生が率先して生殖と内分泌を有機的に結び付ける検討をしていただき、これらの努力により生殖医療の質の向上に貢献することを期待したいと思います。